

## 「いのちの自由」

菊田行佳

「13ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』14 言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」

(ルカによる福音書18章13-14節)

キリスト教がもたらす救いというと、「罪の赦し」とか、「罪からの解放」として、聞かれた方も多いことと思われまふ。言葉としてはその通りなのですが、今ひとつ私たちの身近な問題として考えにくいということも、また確かなことだと思ひます。そこで今回は、罪ということを一一人一人にとって身近なこととして考えられるように、一つの詩を参考にして考えてみたいと思ひます。

キリスト教の詩人で、八木重吉という人がいます。重吉の詩の中に、「草にすわる」という題の詩があります。

わたしの まちがいだった /わたしの まちがいだった /こうして 草にすわれば  
それがわかる

このような詩であります、ここで言われている草というのは、単に大自然の大きさを意味しているのではなく、もっと根元的な、私たちすべてのものを生かしている「いのち」そのものを、そのまま私たちにそらすことなく伝えてくれる伝達者としてであります。そしてキリスト者である重吉にとっては、その「いのち」とは、生きとし生けるものを生かし支えている神からくるものであり、いわばそれは「キリストのいのち」というものであるわけだ。ですから、重吉がここでうたっているのは、大自然の草に抱かれた時、そこで自ずと神からの「いのち」の流れに身を置くことになり、それがゆえに、そのいのちの流れを停滞させる「私」に固執させ、自分の心を腐らせる何ものかが、自分の中にあることに気づかされたのだということだ。その何ものかを「わたしの まちがい」として、重吉は表現しているということだ。

このいわば根元的な人が所有する「わたしの まちがい」を、重吉はキリスト教でいうところの「罪」として考えているわけだ、ここでの詩は、単に罪が自分の中にあることを告白するという、後ろめたさに支配された詩なのではありません。それ以上に、草を媒介として、重吉が神からもたらされる「いのち」に触れられているということの方がより大切だ。そこには、絶対的な「いのち」からの隔絶はなく、すでに「いのち」に触れられている「すくい」の喜びに満ちた歓喜がうたわれているのです。そしてそのことを逆に言えば、神から生かされていることを受け取ることで、その存在そのものをゆるされているがゆえに、自らの間違いを認めることが出来たのだということだ。この自分自身で自らの間違いを認められるということは、「私」の中に閉じこもっている、固執した自我から解放されるということが言えるでしょう。私たちが抱える苦しみの大きなところに、

他者からなされる評価を恐れるということがあると思いますが、その否定的な評価を恐れるあまり、自分の間違いを認めないという姿勢が私たちには知らず知らず身に付いてしまっているのだと思います。そのように閉ざされた「私」から、自らの間違いを認めることによって、解き放たれようというのが、キリスト教でいうところの「罪からの解放」といって良いのだと思います。自分ですでに認めている自らの間違いを、後から人に指摘されても、すでにもう大丈夫だという状態のことです。逆に言えば、「いのち」の交流を断ってしまったままでは、自らの間違いを隠し続けて、いつまでも他人の目から逃れられずに、「私」の中に閉じこもったままになって、大変不自由な生になってしまうのだということであるでしょう。そのような「いのち」との接触を失ってしまった現代に生きる一人として、自らの思いを谷川俊太郎氏は、重吉の詩の後に、このように続けて詩に綴っています。

（重吉の詩の後） そう八木重吉は書いた（その息遣いが聞こえる） /そんなにも深く自分の間違いが /腑に落ちたことが私にあったか //草にすわれないから /まわりはコンクリートしかないから /私は自分の間違いを知ることが出来ない //たったひとつでも間違いに気がついたら /すべてがいちどきに瓦解しかねない /いすに座って私はぼんやりそう思う //私の間違いじゃないあなたの間違いだ /あなたの間違いじゃない彼等の間違いだ /みんな間違っていれば誰も気づかない //草に座れぬまま私は死ぬのだ /間違ったまま私は死ぬのだ /間違いを探しあぐねて

冒頭に掲載した聖書の箇所では、徴税人という職業の人が、神に向かって胸を打ちながら自らの身を憐れんでくださいと懇願しているところです。この胸を打つというのは、心から自らの過ちを深く懺悔した時にする仕草です。その姿を見て、神は彼を義としたとあります。これは、神がそのあなたの今の姿こそ、すべての人の中で、最も正しいものだと認めたということでもあります。新約聖書の中で直接このように神が義としたと完了形で言われているのはこの箇所だけです。その正しさとは、人が、神が生かす「いのち」の流れをせき止めずに、自らをその「いのち」の交流に乗せて行くという意味での正しさなのです。この神が生かす「いのち」の流れに乗っている時こそ、私たちは本当の意味で自由でいられます。他の人にも、自分自身にも束縛されずに、何ものにも支配されないいのちの自由があるのです。

キリスト教は、自らの罪を自覚させ、そして悔い改めを求めるという厳しい信仰だと思われるかも知れません。そして、このことはある面ではあたっていることでもあります。しかし、その目的は、悔い改めを怠った者を、地獄へ突き落とすぞといったような、恐れによって改心を迫るというものではありません。そうではなく、本来あるべき人が最も自由に、より良く生きる方へと誘うための回心（心の向きを変えることー悔い改めの本来の意味）を求める信仰なのです。自らの間違いを認めることは、確かに一時的な苦痛を伴うことですが、自分の存在することがゆるされていることに支えられて、その痛みをくぐり抜けることが出来た時、そこには自由ないのちが待っていることが約束されています。そのことを、今回はお伝えしたいと思います。（今回の文章は、井上洋治・山根道公共著『風のなかの想い』を参照しました。）